イタリア語非対格自動詞補文の使用分布と統語構造

上　野　貴　史

【キーワード】定形補文、非定形補文、非対格、小節構造、与格

1．はじめに

イタリア語の非対格自動詞には、動詞の項として補文が出現し、その補文が動詞の文法的主語となるものがある。この補文を持つ動詞（V）の統語構造を、文法的主語である補文（CP）と、選択的な与格（*a* NP）として記述すると（1）のようになる。

（1）　$[_{V}$ V]($[_{PP}$ *a* NP])$[_{CP}$ CP]

この補文の形式としては、補文標識 *che* で導かれる定形補文（2）と、ゼロ不定詞（*φInf*）（3）と *di* 付き不定詞（*diInf*）（4）という二種類の非定形補文が存在する。

（2）定形補文：$[_{VP}$ $[_{V'}$ $[_{V}$ V]($[_{PP}$ *a* NP])$[_{CP}$ *che*]]]

non $[_{V}$ **importa**]$[_{CP}$ *che* quelle scarpe fossero del cugino Giuseppe] (NARRAT_7)[1)]

not　is important　that　those　shoes　were　of-the cousin　Giuseppe

（3）非定形補文：$[_{VP}$ $[_{V'}$ $[_{V}$ V]($[_{PP}$ *a* NP])$[_{CP}$ *φInf*]]]

$[_{V'}$ $[_{PP}$ ai giocatori patologici] non $[_{V}$ **importa**]$[_{CP}$ *vincere*]] (STAMPA_10)

to　players　pathological　not　is important　win

（4）非定形補文：$[_{VP}$ $[_{V'}$ $[_{V}$ V]($[_{PP}$ *a* NP])$[_{CP}$ *diInf*]]]

$[_{V'}$ $[_{PP}$ ti]$[_{V}$ **importa**] molto $[_{CP}$ *di prendere* il　tè senza latte]]? (NARRAT_7)

you-*DAT*　is important　much　*di*　have　the tea without milk

ここで問題となるのが、（3）と（4）の非対格自動詞 *importare* の非定形補文の交替が、どのように分布するかということである。この交替に関しては、ほとんどの動詞において非定形補文の形式による意味の差がないとされる[2)]。意味が変わらないこのような二種類の非定形補文が存在することの要因の一つとしては、古い時代に存在しなかった *diInf* 形式の通時的発達ということが考えられる。Maiden（1995: 206–207）では、ラテン語からロマンス語への革新は、「前置詞＋不定詞」補文の導入であり、ラテン語には、定形補文や *φInf*（法動詞・非人称動詞や意志・知覚・断言の動詞と共に）は存在したが、*diInf* のような非定形補文はロマンス語において発達したということが指摘されている。さらに Skytte（1983: 247）は、従属節の動詞の主語と、主節の主語が異なる場合、（5）のような通時的な推移があるという指摘をしている。

(5) Skytte (1983: 247)

第一段階：ti　**prego** *che* tu　venga

you-*ACC* ask-*1Sg* that you-*NOM* come

第二段階：ti **prego** *che* tu venga

+

ti **prego** *a venire/* ti **prego** *di venire/* ti **prego** *venire*

第三段階：ti **prego** *di venire*

(5) は、定形補文だけが存在していた第一段階の後、定形補文と *aInf*、*diInf*、*φInf* という三つの非定形補文が混在した第二段階の時期を経て、第三段階で *diInf* 形式として現代語で固定化していることを示している。このような *diInf* 形式の発達は斜格では安定して固定化しているが、非対格自動詞では、元々存在していた *φInf* 補文と、歴史的に発達してきた *diInf* 補文の構造が現代まで競合していると言うことが、非対格自動詞の二種類の非定形補文の交替に関わっていると推察される。

そこで、本稿では、現代イタリア語での非対格自動詞の補文における使用分布を数量的に分析し、統語構造の点から各動詞の補文の形式を考察していくことにする。データとしては、現代イタリア語の文章語のコーパスである Università di Bologna で作成された CODIS コーパス[3] を用いることとする。データの収集方法は、各動詞に付き、コーパス内で500語以上の用例を収集し、この用例の中から補文構造で使用されているものを抽出することとした。このようなコーパスを用いて定形補文を含めた非対格自動詞の補文の使用分布を明らかにし、この分布が統語構造の相違に基づくものであることを明らかにしていくことが本稿の目的となる。

2．補文構造を持つ非対格自動詞

補文構造をとる非対格自動詞は、統語構造と補文形式の選択に一定のルールがあるもの（非対格自動詞Ａ類）と、そうでないもの（非対格自動詞Ｂ類）の二種類に区別することができる。Serianni (1989: 565)/Skytte (1983: 276) などの先行研究では、特に非定形補文に関して各グループに (6) と (7) のような動詞が列挙されている[4]。

(6) 非対格自動詞Ａ類

apparire "to seem (clear)", **parere/risultare/sembrare** "to seem", **riuscire**[5] "to seem/ to manage to", **tornare** "to become again", **venire**[5] "to come"

(7) 非対格自動詞Ｂ類

a. *diInf* 補文：**accadere/avvenire/capitare** "to happen", **andare** "to fit"

b. *φInf* 補文：**bisognare** "to be necessary", **convenire** "to be convenient", **stare** "to be up to"

c. *φInf*・*diInf* 補文：**bastare** "to be sufficient/ that's enough", **costare** "to be cost", **dispiacere/dolere/**

rincrescere “to be sorry”, **giovare** “to be useful”, **importare/premere** “to be important”, **interessare** “to be interested”, **occorrere** “to be needed”, **pesare**[6] “to be influential”, **piacere** “to be liked”, **ripugnare** “to be disgusted”, **seccare** “to be annoyed”, **spettare/toccare** “to be up to”, **stupire** “to be amazed”, **succedere** “to happen”

（7c）には、*φInf* と *diInf* の二種類の補文形式が出現する動詞が列挙されているが、これらの動詞の中には、現代イタリア語において、*piacere* のように、ほぼ *φInf* 補文として出現することが分かる動詞がある一方で、*importare/rincrescere* のように *diInf* 補文としてもある程度出現する動詞も混在している。本稿では、このような動詞の補文形式の使用分布と統語構造との関係を明らかにすることを目的としているため、まず統語構造と補文形式の選択に一定のルールがある非対格自動詞Ａ類の統語構造から考察を行っていく。

３．非対格自動詞Ａ類

3.1. 非対格自動詞Ａ類の統語構造

拙稿（2014）では、統語構造の使用分布が明確な非対格自動詞Ａ類の動詞の補部を小節構造として分析を行っている。

（8）mia moglie **pareva**　davvero stupita (NARRAT_3)

my　wife　seemed-*3Sg* really　astonished

ここで（8）のような文の構造を、（9）で示すように、動詞 *pareva* の後に、主語 *mia moglie* と述部 *davvero stupita* で構成される小節（SC）として記述することにする。

（9）小節構造：$[_{VP}\ [_{V}$ **pareva**$][_{SC}\ [_{DP}$ mia moglie$][_{AP}$ davvero stupita$]]]$

（9）のような人称構造の場合は、小節の主語が、小節の主語位置から、主節の主語位置への繰り上げが行われる。

補文が出現する非対格自動詞Ａ類を小節構造として分析すると、*φInf* 補文の場合、人称構造と、小節の述部に叙述形容詞が出現する構造があり、それぞれ（10a）・（10b）のように示すことができる。

（10）a. nessuno **pareva**　*aver notato* (NARRAT_2)

nobody　seemed-*3Sg* have　noticed

$[_{VP}\ [_{V}$ **pareva**$][_{SC}\ [_{PRN}$ nessuno$][_{DP}$ *aver notato*$]]]$

b. gli　**pareva**　giusto *farlo* sapere a Alice (NARRAT_3)

him-*DAT* seemed-*3Sg* right　make-it know　to Alice

$[_{VP}\ [_{V'}\ [_{PRN}$ gli$][_{V}$ **pareva**$][_{SC}\ [_{DP}$ *farlo* sapere a Alice$][_{AP}$ giusto$]]]]$

人称構造である（10a）は、主語が *nessuno*、述部が *aver notato* という小節で構成されており、小節の主語が主節の主語の位置に移動する。一方、（10b）は主語が *farlo sapere a Alice* という *φInf*、

述部が形容詞句 *giusto* という小節構造となっており、小節の主語である *φInf* が小節の外に移動することになる。このように、非対格自動詞は、小節の主語である名詞句に格を付与できないため、小節の主語を小節の外に移動する必要が生じている。

次に、定形補文[7] に関しては、定形補文を小節構造における一つの構成要素と考えると、定形補文が小節の主語となり、述部には選択的に形容詞句が出現することになる。

(11) a. mi　**pareva**　probabile *che* ci　fosse qualcosa di serio (NARRAT_3)

me-*DAT* seemed-*3Sg* probable　that　there was　something　of　serious

[$_{VP}$ [$_{V'}$ [$_{PRN}$ mi][$_{V}$ **pareva**][$_{SC}$ [$_{CP}$ *che* ci fosse qualcosa di serio][$_{AP}$ probabile]]]]

b. a prima vista **pareva**　*che* non ci　fosse spazio (NARRAT_3)

at first　glance seemed-*3Sg* that　not　there　was　space

[$_{VP}$ [$_{V}$ **pareva**][$_{SC}$ [$_{CP}$ *che* non ci fosse spazio][$_{PRN}$ *pro*]]]

(11a) は、小節の主語に定形補文、述部に *probabile* という形容詞句が出現している。この場合も、非定形補文が小節の主語となっている (10b) と同様、小節の主語である定形補文が小節の外に移動することになる。一方、小節の述部に形容詞句を選択しない (11b) を小節構造として分析すると、音形のない名詞句である空範疇 *pro* を小節の述部に置くことになる。この小節構造の述部が *pro* という構造は、(12) のような非対格構造として記述することも可能である。

(12) [$_{VP}$ [$_{V}$ **pareva**][$_{CP}$ *che* non ci fosse spazio]]

もう一つの非定形補文である *diInf* に関しては、(13) のように、小節の主語に音形を持たない空範疇 *pro*、述部に *diInf* 補文が現れることになる[8]。

(13) gli　**pareva**　*di aver udito* dei　rumori (NARRAT_3)

him-*DAT* seemed-*3Sg di* have　heard　some　rumors

[$_{VP}$ [$_{V'}$ [$_{PRN}$ gli$_{i}$][$_{V}$ **pareva**][$_{SC}$ [$_{PRN}$ *pro*][$_{CP}$ [$_{C}$ *di*][$_{TP}$ [$_{PRN}$ PRO$_{i}$][$_{T'}$ [$_{T}$][$_{VP}$ *aver udito* dei rumori]]]]]]]

(13) では、非定形補文における不定詞の主語 PRO が与格である *gli* にコントロールされることになる。

以上、本節では、拙稿 (2014) の考察に基づき、補文をとる非対格自動詞A類の統語構造の分析を行った。ここで、取り上げた統語構造をまとめたものが (14) となる。

(14) A類定形補文：　A① [$_{VP}$ [$_{V'}$ [$_{V}$ **V**]([$_{PP}$ *a* NP])[$_{SC}$ [$_{CP}$ *che*][$_{PRN}$ *pro*]]]]

A② [$_{VP}$ [$_{V'}$ [$_{V}$ **V**]([$_{PP}$ *a* NP])[$_{SC}$ [$_{CP}$ *che*][$_{AP}$ AP]]]]

A類 *φInf* 補文：　A③ [$_{VP}$ [$_{V'}$ [$_{V}$ **V**]([$_{PP}$ *a* NP])[$_{SC}$ [$_{DP}$ DP][$_{DP}$ *φInf*]]]]

A④ [$_{VP}$ [$_{V'}$ [$_{V}$ **V**]([$_{PP}$ *a* NP])[$_{SC}$ [$_{DP}$ *φInf*][$_{AP}$ AP]]]]

A類 *diInf* 補文：　A⑤ [$_{VP}$ [$_{V'}$ [$_{V}$ **V**]([$_{PP}$ *a* NP])[$_{SC}$ [$_{PRN}$ *pro*][$_{CP}$ *diInf*]]]]

3.2. 非対格自動詞Ａ類のコーパス分析

次に今回収集したコーパスデータから、非対格自動詞Ａ類の補文の使用分布を考察してみる。収集したデータ全体で、補文構造として使用されている割合を「補文構造使用率」として示し、その補文構造の中で定形補文（Ａ①・Ａ②）[9] と非定形補文（Ａ③・Ａ④・Ａ⑤）の使用分布を示したものが＜表１＞となる。

＜表１：定形補文と非定形補文（Ａ類）＞

動詞	補文構造使用率	Ａ①・Ａ②：定形補文	Ａ③・Ａ④・Ａ⑤：非定形補文
parere	45.1%	61.1%	38.9%
sembrare	41.7%	33.4%	66.6%
risultare	21.5%	55.6%	44.4%
apparire	8.2%	51.2%	48.8%
riuscire	2.6%	0.0%	100.0%

＜表１＞から、*parere/sembrare/risultare/apparire* が定形補文と非定形補文においてほぼ同じような頻度で使用される動詞であること、*riuscire* が非定形補文のみで出現する動詞であることが分かる。この定形補文として使用されている４つの動詞について、統語構造Ａ①とＡ②での使用分布を示したものが＜表２＞となる。

＜表２：定形補文（Ａ類）＞

動詞	Ａ① $[_{SC}\ [_{CP}\ \textit{che}][_{PRN}\ \textit{pro}]]$ (+ *DAT*)	Ａ② $[_{SC}\ [_{CP}\ \textit{che}][_{AP}\ \mathrm{AP}]]$ (+ *DAT*)
parere	95.2%（61.5%）[10]	4.8%（100.0%）
sembrare	90.0%（35.8%）	10.0%（ 66.7%）
risultare	82.7%（11.3%）	17.3%（ 0.0%）
apparire	9.5%（ 0.0%）	90.5%（ 5.3%）

＜表２＞からは、*parere/sembrare/risultare* がＡ①の非対格構造での使用が多く見られるのに対して、*apparire* が小節に形容詞述部が現れるＡ②の構造で主に使用されている動詞であることが分かる。

次に非定形補文の使用分布を示したものが＜表３＞となる。

＜表３：非定形補文（Ａ類）＞

動詞	A③：[$_{SC}$ [$_{DP}$ DP][$_{DP}$ *φInf*]] (+ *DAT*)	A④：[$_{SC}$ [$_{DP}$ *φInf*][$_{AP}$ AP]] (+ *DAT*)	A⑤：*diInf* (+ *DAT*)
apparire	27.5%（0.0%）	72.5%（ 3.4%）	0.0%（ 0.0%）
risultare	65.0%（0.0%）	35.0%（38.1%）	0.0%（ 0.0%）
sembrare	78.7%（0.6%）	3.3%（42.9%）	18.0%（ 84.2%）
parere	69.8%（0.0%）	5.8%（45.5%）	24.3%（ 93.5%）
riuscire	7.5%（0.0%）	37.5%（60.0%）	55.0%（100.0%）

非定形補文においては、*apparire/risultare* が *φInf* 補文でのみ出現し、*sembrare/parere/risultare* がＡ③の人称構造、*apparire/riuscire* がＡ④の述部形容詞句構造で多く使用されている。また、人称構造のＡ③においては、どの動詞もほとんど与格の出現が見られない[11)]。このＡ③が与格をとらないということを統語構造に反映するために、Ａ③の統語構造を（15）のように修正する。

（15）Ａ類 *φInf* 補文：Ａ③’ [$_{VP}$ [$_{V}$ **V**][$_{SC}$ [$_{DP}$ DP][$_{DP}$ *φInf*]]]

sembrare/parere/riuscire で使用されているＡ⑤の *diInf* 補文においては、与格がほぼ義務的となっているが、このことについては次節で論じることにする。

以上のコーパスの分析から各動詞がとる統語構造は、（16）のように示すことができる[12)]。

（16）a. **parere/sembrare**　：Ａ①、Ａ②、Ａ③’、Ａ④、Ａ⑤

b. **apparire/risultare**：Ａ①、Ａ②、Ａ③’、Ａ④

c. **riuscire**　：Ａ③’・Ａ④ “to seem”、Ａ⑤ “to manage to”

すべての統語構造で出現する動詞としては、*parere/sembrare* があり、*parere* はＡ①である定形補文、*sembrare* はＡ③’である *φInf* 補文を述部とする人称構造として最もよく使用されている。*apparire/risultare* は、*diInf* 補文の統語構造をとらない動詞であり、*apparire* は定形・非定形補文とも小節に形容詞述部をとるＡ②・Ａ④の構造で多く出現する。一方、*risultare* は、*apparire* と同じように定形・非定形補文とも同じような頻度で使用されるが、Ａ①・Ａ③’の統語構造で多く使用される動詞となっている。*riuscire* に関しては、*φInf* 補文が「～らしい」、*diInf* 補文が「うまく～できる」というように、非定形補文の形式によって意味を区別している。

3.3. 非対格自動詞Ａ類の語彙特性

非対格自動詞Ａ類の語彙的特性としての項構造は、定形補文Ａ①・Ａ②と、*φInf* 補文Ａ③’・Ａ④については、補文が <Proposition>「命題」という意味役割となる。選択的に出現する与格は、「動詞の心的状態を経験する人」を表す <Experiencer>「経験者」という意味役割を示す。いずれの意味役割も動詞の内項に出現し、これを示したものが（17）となる。

（17）A①・A②・A③'・A④：<(Experiencer), Proposition>

([$_{PP}$ *a* NP])　[$_{SC}$]

A①～④の与格が <Experiencer> の意味役割を示す一方で、A⑤の与格はこれとは異なる意味役割を示す。

（18）a. **sembra** *che* tu　abbia la febbre

seems　that you-*NOM* have　the fever

b. ti　**sembra** *di avere* la febbre

you-*DAT* seems　*di* have　the fever

（18b）で示した *diInf* 補文は、A①である（18a）の定形補文から通時的に発達したものとして捉えることができる。（18b）の *diInf* 補文においては、（18a）の定形補文の主語である *tu* が与格の *ti* として出現している。これは、*diInf* 補文の論理的主語が与格で示されていることを意味していることから、（18b）はこの与格 *ti* と *diInf* 補文全体で <Proposition> の意味役割を示すと考えられ、これを示したものが（19）となる。

（19）A⑤：<Proposition>

[$_{SC}$]

このように、A⑤の与格は、<Experiencer> ではなく、<Proposition> の一部となる。この項構造に基づいて、3.1. で考察したA⑤の統語構造を再分析すると、A⑤は（13）で示したような小節の主語に *pro* を持つ小節構造ではなく、*di* を補文標識とする補文構造に修正する必要が生じると思われる（(20)=(13）を修正）。

（20）gli　**pareva**　*di aver udito* dei　rumori (NARRAT_3)

him-*DAT* seemed-*3Sg* *di* have　heard　some rumors

[$_{VP}$ [$_{V'}$ [$_{PRN}$ gli$_i$][$_V$ **pareva**][$_{CP}$ [$_C$ *di*][$_{TP}$ [$_{PRN}$ PRO$_i$][$_{T'}$ [$_T$][$_{VP}$ *aver udito* dei rumori]]]]]]]

（20）における構造では、不定詞の主語である PRO は、義務的に論理的主語である与格 *gli* にコントロールされることになる。＜表３＞で示したコーパスデータにおいても、与格の出現は *riuscire* においては完全に義務的、*parere/sembrare* においても93.5% と84.2% でほぼ義務的となっている。このことから、A⑤の統語構造を（21）で示す非対格構造に修正することにする。

（21）A類 *diInf* 補文：A⑤' [$_{VP}$ [$_{V'}$ [$_V$ **V**][$_{PP}$ *a* NP$_i$][$_{CP}$ [$_C$ *di*][$_{TP}$ [$_{PRN}$ PRO$_i$][$_{T'}$ [$_T$][$_{VP}$ *Inf*]]]]]]

本節では、非対格自動詞A類の項構造を検証することにより、統語構造の再分析を行った。A①～④の項構造は、<Proposition> と選択的な <Experiencer> となる一方で、A⑤は、義務的な与格と補文全体で <Proposition> という意味役割となるため小節構造ではなく非対格構造となる。この *diInf* 補文が非対格構造とすると、同じ項構造である定形補文も、小節構造ではなく（22）のような非対格構造として捉え直す必要があると思われる。

（22）A類定形補文：A①' [$_{VP}$ [$_{V'}$ [$_V$ **V**]([$_{PP}$ *a* NP])[$_{CP}$ *che*]]]

4．非対格自動詞Ｂ類

4.1. 非対格自動詞Ｂ類のコーパス分析

これまでの非対格自動詞Ａ類の分析に基づいて、非定形補文に交替が見られる非対格自動詞Ｂ類の分析を行う。

＜表４：定形補文と非定形補文（Ｂ類）＞

動詞	補文構造使用率	定形補文（+ *DAT*）	非定形補文
constare	10.0%	100.0%（ 70.6%）	0.0%
succedere	6.1%	90.7%（ 4.1%）	9.3%
avvenire	0.7%	80.0%（ 0.0%）	20.0%
accadere	7.3%	75.4%（ 0.0%）	24.6%
importare	9.0%	56.3%（ 23.1%）	43.7%
dispiacere	27.2%	37.7%（ 98.8%）	62.3%
capitare	38.1%	26.9%（ 2.4%）	73.1%
rincrescere	56.8%	20.0%（100.0%）	80.0%
pesare	1.1%	20.0%（100.0%）	80.0%
bastare	40.7%	17.6%（ 7.5%）	82.4%
interessare	13.6%	11.7%（100.0%）	88.3%
dolere	8.3%	9.5%（100.0%）	90.5%
occorrere	80.7%	8.3%（ 0.0%）	91.7%
andare	1.6%	7.9%（100.0%）	92.1%
piacere	34.4%	7.3%（100.0%）	92.7%
premere	26.6%	6.6%（100.0%）	93.4%
bisognare	99.8%	4.4%（ 0.0%）	95.6%
convenire	63.1%	2.9%（ 15.4%）	97.1%
giovare	30.3%	2.2%（ 0.0%）	97.8%
toccare	24.7%	0.0%（ 0.0%）	100.0%
ripugnare	18.1%	0.0%（ 0.0%）	100.0%
spettare	12.1%	0.0%（ 0.0%）	100.0%
costare	6.4%	0.0%（ 0.0%）	100.0%

まず、非対格自動詞Ｂ類の定形補文と非定形補文の分布を示した＜表４＞から、定形補文のみを後続させる動詞が *constare*、非定形補文のみを後続させる動詞が *toccare/ripugnare/spettare/costare* であることが分かる。定形補文の与格に関しては、*rincrescere/pesare/interessare/dolere/*

andare/piacere/premere/dispiacere[13] が義務的、*avvenire/accadere/occorrere/bisognare/giovare/succedere/capitare/bastare*[14] では与格項をとらない動詞であることが認められる。

次に、非定形補文の分布を示したものが＜表５＞となる。

＜表５：非定形補文（Ｂ類）＞

動詞	*φInf*（+ *DAT*）	*diInf*（+ *DAT*）
piacere	100.0%（ 99.0%）	0.0%（ 0.0%）
ripugnare	100.0%（ 94.1%）	0.0%（ 0.0%）
interessare	100.0%（ 85.7%）	0.0%（ 0.0%）
pesare	100.0%（ 83.3%）	0.0%（ 0.0%）
costare	100.0%（ 70.5%）	0.0%（ 0.0%）
giovare	100.0%（ 6.6%）	0.0%（ 0.0%）
occorrere	100.0%（ 0.1%）	0.0%（ 0.0%）
bisognare	100.0%（ 0.0%）	0.0%（ 0.0%）
bastare	99.6%（ 25.0%）	0.4%（100.0%）
convenire	99.5%（ 22.2%）	0.5%（100.0%）
toccare	98.2%（ 93.2%）	1.8%（100.0%）
premere	92.9%（ 84.7%）	7.1%（100.0%）
dolere	89.5%（ 76.5%）	10.5%（100.0%）
spettare	86.7%（100.0%）	13.3%（100.0%）
dispiacere	66.1%（ 91.5%）	33.8%（100.0%）
rincrescere	60.0%（100.0%）	40.0%（100.0%）
importare	58.1%（ 27.8%）	41.9%（100.0%）
accadere	6.2%（ 0.0%）	93.8%（ 46.7%）
andare	0.0%（ 0.0%）	100.0%（100.0%）
capitare	0.0%（ 0.0%）	100.0%（ 71.1%）
avvenire	0.0%（ 0.0%）	100.0%（ 66.7%）
succedere	0.0%（ 0.0%）	100.0%（ 60.0%）

非定形補文においては、*piacere/ripugnare/interessare/pesare/costare/giovare/occorere/bisognare* が *φInf* だけを補文とし、*andare/capitare/avvenire/succedere* が *diInf* だけを補文とする。これら以外は、*φInf* 補文と *diInf* 補文とで揺れが確認されるが、出現が拮抗しているものは、*dispiacere/rincrescere/importare* などで、他の動詞ではいずれかの非定形補文が優位に出現している。

以上の非対格自動詞Ｂ類のコーパスデータ調査の結果から、各動詞が後続可能とする補文は（23）のようになる。

（23）a. 定形補文：**constare** “to be known”

b. *φInf* 補文：**costare**/**ripugnare**[15)]

c. *φInf*・*diInf* 補文：**spettare**/**toccare**

d. 定形・*diInf* 補文：**accadere**/**andare**/**avvenire**/**capitare**/**succedere**

e. 定形・*φInf* 補文：**bisognare**/**giovare**/**interessare**/**occorrere**/**pesare**/**piacere**

f. 定形・*φInf*・*diInf* 補文：**bastare**/**convenire**/**dispiacere**/**dolere**/**importare**/**premere**/**rincrescere**

Serianni（1989: 565）/ Skytte（1983: 276）で示されている非定形補文の交替の一覧である（7）と、今回のコーパス調査での結果においては、若干の相違がみられる。（23b/e）の動詞は、今回の調査で *φInf* 補文形式でのみ出現しているものであるが、（7c）では *bisognare* 以外の動詞は *diInf* 補文の交替がある動詞として分類されている。また、今回の調査で（23c/f）のような非定形補文の交替があるとした動詞においても、（7c）では *convenire* は *φInf* 補文のみに出現する動詞となっている。（23）で示した分類では、今回の調査で出現例があったものはそれが１例であっても出現可能として分類しているが、その頻度は動詞によって大きく異なる。例えば、*φInf* 補文に対する *diInf* 補文の使用頻度は、*bastare*（0.4%）、*convenire*（0.5%）、*toccare*（1.8%）、*premere*（7.1%）、*dolere*（10.5%）、*spettare*（13.3%）というように低いものとなっている。このような動詞の共通点としては、定形補文を後続することが少ない動詞ということであり[16)]、このことが *diInf* 補文が発達していないことと関係していると考えられる。一方、*importare*（41.9%）、*rincrescere*（40.0%）、*dispiacere*（33.8%）という高い頻度で *diInf* 補文が使用されている動詞は、定形補文の使用率も高い[17)]。このようなことから、*diInf* 補文の出現は、その動詞が定形補文をとるかどうかに大きく依存していることが分かる。

4.2. 非対格自動詞Ｂ類の統語構造

非対格自動詞Ｂ類の統語構造を各動詞における項構造から考察してみる。まず、（24）のような非対格自動詞Ｂ類の定形補文の統語構造は、（25）のように、非対格自動詞Ａ類の①’と同じ非対格構造となる。

（24）mi　**rincresce** molto *che* i　miei cani l’abbiano　disturbata (NARRAT_13)

me-*DAT* is sorry　much　that　the my　dogs　her-*ACC*-have-*3PI* disturbed

（25）Ｂ類定形補文：Ｂ① (= Ａ①’) $[_{VP}\ [_{V'}\ [_{V}\ \mathbf{V}]([_{PP}\ a\ \mathrm{NP}])[_{CP}\ che]]]$

この非対格自動詞Ｂ類の定形補文の項構造を、与格で示される <Experiencer> と *piacere* などに代表される心理動詞の補文 <Theme>「主題」と設定して、各動詞の <Experiencer> の選択に基づいて分類すると（26）のようになる。

（26）a. mi　**dispiace** *che* l'hai　sposato (NARRAT_13)

me-*DAT* is sorry　that　him-*ACC*-have-*2Sg* married

<Experiencer, Theme>：**andare/dispiacere/dolere/interessare/pesare/piacere/premere/rincrescere**

b. non mi　**importa** *che* lui non abbia un soldo (NARRAT_7)

not　me-*DAT* is important that　he　not　has　a　penny

<(Experiencer), Theme>：**constare/convenire/importare**

c. **bisognava** *che* qualcuno parlasse (NARRAT_13)

was necessary that　someone　spoke

<Theme>：**accadere/avvenire/bastare/bisognare/capitare/giovare/occorrere/succedere**

（26a）は与格が義務的、（26b）は選択的、（26c）は与格を取らない動詞となる。

次に非対格自動詞Ａ類で見られなかった（27）のような非人称の *φInf* 補文の統語構造は、（28）のような非対格構造となる。

（27）mi　**rincresce** *disturbarti* (NARRAT_7)

me-*DAT* is sorry　disturb-you-*ACC*

（28）Ｂ類 *φInf* 補文：Ｂ② $[_{VP}\ [_{V'}\ [_{V}\ \mathbf{V}]([_{PP}\ a\ \mathrm{NP}])[_{CP}\ \varphi Inf]]]$

このＢ②の項構造も、定形補文と同様に、与格を <Experiencer>、*φInf* 補文を <Theme> として <Experiencer> の選択によって分類すると（29）のようになる。

（29）a. mi　**dispiace** *dovertelo*　dire (NARRAT_13)

me-*DAT* is sorry　must-you-*DAT*-it-*ACC* say

<Experiencer, Theme>：**dispiacere/interessare/pesare/piacere/premere/rincrescere/ripugnare/spettare/toccare**[18)]

b. non **importa** *saperlo* (PRACC_4)

not　is important　know-it-*ACC*

<(Experiencer), Theme>：**bastare/convenire/costare/dolere/importare**

c. **bisognava** *affrontare* il　nemico (NARRAT_13)

was necessary face　the enemy

<Theme>：**bisognare/giovare/occorrere**

この定形補文（26）と *φInf* 補文（29）における <Experiencer> の選択に関しては、動詞ごとでほぼ同じ選択を行っている。例えば、*dispiacere/interessare/pesare/piacere/premere/rincrescere* は、定形補文と *φInf* 補文のどちらの構造においても <Experiencer> が義務的となっている一方で、*bisognare/giovare/occorrere* は、<Experiencer> をとらない動詞となっている。

これらの動詞の中で、定形補文を後続させない *spettare* と *toccare* は、与格の出現の仕方が他

の動詞と異なる。

（30）a. **spettava** a lui *decidere* la partenza (NARRAT_13)

was up　to him decide　the departure

b. non **tocca** a me *dirlo* (STAMPA_10)

not　is up　to me　say-it

（30）のように、*spettare/toccare* の与格とされる部分は「前置詞 *a*＋（代）名詞」という形式で出現し、主節動詞に後置されることが多い。このような主節動詞の後ろに二つの構成要素がある構造は、（10b）のような *φInf* 補文が小節の主語、形容詞句が述部というA④の構造に類似している。

（10b）$[_{VP}$ $[_{V}$ gli **pareva**$][_{SC}$ $[_{DP}$ *farlo* sapere a Alice$][_{AP}$ giusto$]]]$

（10b）では、小節の主語である *φInf* 補文が小節から移動するが、*spettare/toccare* の場合も *φInf* 補文が小節から移動しており、二つの構造で同じ現象が起こっている。このようなことから、*spettare/toccare* は小節構造であり、（30a）は（31）のような構造として捉えることができると思われる[19]。

（31）$[_{VP}$ $[_{V}$ **spettava**$][_{SC}$ $[_{DP}$ *decidere* la partenza$][_{PP}$ a lui$]]]$

B類 *φInf* 補文：B③ $[_{VP}$ $[_{V}$ **V**$][_{SC}$ $[_{DP}$ *φInf*$][_{PP}$ *a* NP$]]]$

次に、*diInf* 補文は、（32）のように、与格が義務的なものと選択的なものに分けることができる。

（32）a. anche a me **dispiace** *di averti*　deluso (NARRAT_13)

also　to me　is sorry　*di*　have-you-*ACC* disappointed

＜与格が義務的＞：**andare/bastare/convenire/dispiacere/dolere/importare/premere/rincrescere/spettare/toccare**

b. mi　**capita** *di parlargli* (NARRAT_7)

me-*DAT* happens *di*　speak-him-*DAT*

＜与格が選択的＞：**accadere/avvenire/capitare/succedere**

まず、与格が義務的な動詞である（32a）は、A類の *diInf* 補文で与格がほぼ義務的に出現するA⑤’と同じ統語構造となると考えられる（（33））。

（33）B類 *diInf* 補文：B④（＝A⑤’）$[_{VP}$ $[_{V'}$ $[_{V}$ **V**$][_{PP}$ *a* NP$_i][_{CP}$ $[_{C}$ *di*$][_{TP}$ $[_{PRN}$ PRO$_i][_{T'}$ $[_{T}$ $][_{VP}$ *Inf*$]]]]]]$

この場合、（33）の不定詞の主語である PRO は、与格に義務的にコントロールされる必要がある。このため、与格を持たない構造は（34）のように非文法的となる。

（34）a. **Dispiace** (**di*) *perdere* così.

is sorry　(**di*)　lose　like that

b. Non **importa** (**di*) *perdere*. (Rizzi (1991: 517))

not　is important (**di*)　lose

一方、（32b）の動詞は、与格が選択的に出現することから、（33）のような構造から派生すると

いうことは考えにくい。加えて、(32b) の動詞は意味的にすべて「発生・出来事」を表す動詞であり、*diInf* 補文の意味役割は <Theme> ではなく <Event>「出来事」となり、選択的に出現する与格は「述語の表す動作から利益を受ける人」である <Benefactive>「受益者」となる（(35)）。

(35) <(Benefactive), Event>

このような項構造を示す (32b) の動詞の統語構造は、選択的に出現する与格に PRO が義務的コントロールされないため、(36) のように音形のない名詞句である *pro* を設定し、これが PRO をコントロールしていると考える必要がある。従って、(32b) の動詞の統語構造は、*pro* を主語とし、*diInf* 補文を述部とする小節構造とする必要があると考えられる。

(36) B類 *diInf* 補文：B⑤ $[_{VP}\ [_{V'}\ [_{V}\ \mathbf{V}]([_{PP}\ a\ \mathrm{NP}])[_{SC}\ [_{PRN}\ pro_i][_{CP}\ [_{C}\ di][_{TP}\ [_{PRN}\ \mathrm{PRO}_i][_{T'}\ [_{T}\ ][_{VP}\ Inf]]]]]]]$

以上、非対格自動詞B類の動詞がとる統語構造を示したものが (37) となる。

(37) a. **constare**：B①

b. **ripugnare**：B②

c. **bisognare/giovare/interessare/occorrere/pesare/piacere**：B①、B②

d. **andare**：B①、B④

e. **accadere/avvenire/capitare/succedere**：B①、B⑤

f. **spettare/toccare**：B③、B④

g. **bastare/convenire/dispiacere/dolere/importare/premere/rincrescere**：B①、B②、B④

非対格自動詞B類に出現する補文の統語構造は、定形補文がB①、*φInf* 補文がB②・B③、*diInf* 補文がB④・B⑤となる。

5．結　語

以上、本稿では、現代イタリア語での非対格自動詞の補文における使用分布を数量的に分析し、統語構造の点から各動詞の補文形式の考察を行った。この考察から、項構造ごとに補文が出現する非対格自動詞の統語構造をまとめたものが (38) となる。

(38) a. <(Experiencer), Proposition>

小節構造：A② $[_{VP}\ [_{V'}\ [_{V}\ \mathbf{V}]([_{PP}\ a\ \mathrm{NP}])[_{SC}\ [_{CP}\ che][_{AP}\ \mathrm{AP}]]]]$

A③' $[_{VP}\ [_{V}\ \mathbf{V}][_{SC}\ [_{DP}\ \mathrm{DP}][_{DP}\ \varphi Inf]]]$

A④ $[_{VP}\ [_{V'}\ [_{V}\ \mathbf{V}]([_{PP}\ a\ \mathrm{NP}])[_{SC}\ [_{DP}\ \varphi Inf][_{AP}\ \mathrm{AP}]]]]$

非対格構造：A①' $[_{VP}\ [_{V'}\ [_{V}\ \mathbf{V}]([_{PP}\ a\ \mathrm{NP}])[_{CP}\ che]]]$

A⑤' $[_{VP}\ [_{V'}\ [_{V}\ \mathbf{V}][_{PP}\ a\ \mathrm{NP}_i][_{CP}\ [_{C}\ di][_{TP}\ [_{PRN}\ \mathrm{PRO}_i][_{T'}\ [_{T}\ ][_{VP}\ Inf]]]]]]$

b. <(Experiencer), Theme>

非対格構造：B① $[_{VP}\ [_{V'}\ [_{V}\ \mathbf{V}]([_{PP}\ a\ \mathrm{NP}])[_{CP}\ che]]]$

B② $[_{VP}\ [_{V'}\ [_{V}\ \mathbf{V}]([_{PP}\ a\ \mathrm{NP}])[_{CP}\ \varphi Inf]]]$

B④ $[_{VP}\ [_{V'}\ [_{V}\ \mathbf{V}][_{PP}\ a\ \mathrm{NP}_i][_{CP}\ [_{C}\ di][_{TP}\ [_{PRN}\ \mathrm{PRO}_i][_{T'}\ [_{T}\ ][_{VP}\ Inf]]]]]]$

c. <Benefactive, Theme>

小節構造：B③ $[_{VP}\ [_{V}\ \mathbf{V}][_{SC}\ [_{DP}\ \varphi Inf][_{PP}\ a\ \mathrm{NP}]]]$

d. <(Benefactive), Event]>

小節構造：B⑤ $[_{VP}\ [_{V'}\ [_{V}\ \mathbf{V}]([_{PP}\ a\ \mathrm{NP}])[_{SC}\ [_{PRN}\ pro_i][_{CP}\ [_{C}\ di][_{TP}\ [_{PRN}\ \mathrm{PRO}_i][_{T'}\ [_{T}\ ][_{VP}\ Inf]]]]]]]$

A⑤'、B④、B⑤の統語構造で用いられている *diInf* 補文形式は、通時的に定形補文からイタリア語で発達したものとされるが、非対格自動詞においては、(39) で示すように、「A①'→A⑤'」・「B① →B④」のように、非対格構造の定形補文から非対格構造の *diInf* 補文形式となったものと、「B① →B⑤」のように、非対格構造の定形補文から小節構造へと移行したものの二種類が存在する。

(39) a. 非対格構造内での移行：A①'→A⑤'・B①→B④

b. 非対格構造から小節構造の移行：B①→B⑤

(39a) の非対格構造内での移行において *diInf* 補文形式の出現が多いB類の動詞としては、*dispiacere/importare/rincrescere* などがある。このような動詞は、コーパスデータからも分かるように、定形補文での使用も高い頻度を示す動詞となっている。これらの動詞は、定形補文（B①）と、定形補文から移行した *diInf* 補文（B④）、そして元から存在していた *φInf* 補文（B②）が同じ非対格構造として現代イタリア語で共存していることになっている。一方、A類の動詞に関しては、B類の動詞と同様、定形補文（A①'）から *diInf* 補文（A⑤'）への移行が行われ、定形補文と *diInf* 補文の交替は見られるが、*φInf* 補文は今回収集したコーパスデータでは使用されていない。この事実は、A類での非人称の *φInf* 補文形式が通時的に衰退したということが推定できるが、このことに関しては、通時的データを分析することにより今後確認していきたい。また、(39b) の動詞については、定形補文（B①）から *diInf* 補文（B⑤）への移行が行われている。しかしながら、元々 *φInf* 補文形式が存在しないため[20]、非定形補文としては *diInf* 補文のみが確認された。ただし、*accadere/avvenire/succedere* は、定形補文を含めた補文自体での使用が少ないこともあり[21]、*diInf* 補文への移行がそれ程発達していないということが指摘できると思われる。これに対して、*capitare* は補文としての使用頻度が高く[22]、*diInf* 補文での小節構造も多く使われおり、*diInf* 補文が発達している動詞であることが指摘できる。

(39) 以外に、定形補文をとらない *spettare/toccare* にも統語構造B④の *diInf* 補文が出現する。このような動詞は、定形補文がないため、*φInf* 補文（B③）からの移行であると考えられる（(40)）。

(40) 小節構造から非対格構造への移行：B③→B④

このような動詞における *diInf* 補文での出現率は低いが[23]、*diInf* 補文の発達の一つの現象と言えると思われる。

以上、本稿では、現代イタリア語文章コーパスを用いてデータを収集し、各動詞の統語構造と

項構造を分析することにより非対格自動詞がとる補文についての考察を行った。現代イタリア語における非対格自動詞の補文は、元々存在していた定形補文と *φInf* 補文、そして定形補文から発達して生じた *diInf* 補文が複雑な分布を見せているが、本稿では動詞の統語構造と項構造を分析することにより、これらの交替の分布を明らかにした。このような現代語におけるさらなる *diInf* 補文の使用の実態を明らかにするためには、通時的なデータからの考察が必要であるが、このことを今後の課題としていきたい。

付記　本稿は、2015年９月５日、広島大学国際協力研究科で開催された第45回西日本言語学会において「イタリア語非対格自動詞の動詞補文における使用分布と統語構造」と題して口頭発表を行ったものに加筆・修正を施したものである。

註

１）CODIS Corpus においては、サブコーパスとして、“NARRAT”「小説・物語」、“STAMPA”「新聞・雑誌」、“PRACC”「学術的な散文」などを分類している。

２）Skytte (1983) では、非定形補文の違いにより、次のような動詞に意味の差異があることを指摘している。

a) **bastare** + *φInf*：<<essere sufficiente>>、**bastare** + *diInf*：<<ormai bisogna cessare di>>

b) **occorrere** + *φInf*：<<essere necessario>>、**occorrere** + *diInf*：<<accadere>>

c) **ripugnare** + *φInf*：実行されない行為、**ripugnare** + *diInf*：現実・効果的な行動

d) **riuscire** + *φInf*：<<essere>>、**riuscire** + *diInf*：<<sforzo>> の概念を含む

３）約100,000,000語の現代イタリア語文章語コーパス。

４）Serianni（1989）/Skytte（1983）で取り上げられている *valere la pena/ passare per la mente* などの句動詞は、分析の対象外とする。また、*garbare/necessitare/seccare/stare/stupire/venire* は、補文が後続するデータを十分に抽出できなかったために今回は分析の対象外とした。

５）*riuscire/venire* は、Serianni（1989）ではＢ類（*diInf* 補文のみ）に分類されている。

６）*pesare* は Skytte（1983）では（*φInf*/?）としている。

７）本論で扱った定形補文以外に *che* の人称構造がある。

lui **sembrava** sempre *che* passeggiasse (STAMPA_3)

he seemed-*3Sg* always that walked-*3Sg*

８）*diInf* 補文が小節の述部となることについては、Moro（1997）を参照のこと。

９）*parere/sembrare* には、補文標識 *che* が脱落した定形補文が見られる。

sembrava fosse appena scoppiata una bomba (NARRAT_2)

seemed-*3Sg* was-*3Sg* just exploded a bomb

che が脱落した構造は、定形補文全体で *parere* が34.3%、*sembrare* が17.2% であった。

10）各動詞の統語構造を示した割合の後の（　）は、各使用分布において与格が出現している割合を示す。

11）166例ある *sembrare* のA③の構造において１例のみ与格の構造が確認された。

12）Skytte（1983: 283）では、与格が生起する場合、*φInf* 補文も出現可能としている（mi **pare** *vivere/di vivere*）。この *φInf* 補文の統語構造として [$_{VP}$ [$_{V'}$ [$_{PRN}$ mi][$_{V}$ **pare**][$_{CP}$ *vivere*]]] のような構造が想定されるが、今回収集したデータにおいては、非定形補文において *parere*（45例）/ *sembrare*（32例）はすべて *diInf* 補文として出現しており、*φInf* 補文での使用は全く見られなかった。

13）84例中 *dispiacere* の定形補文において１例のみ与格がない構造が見られた。

14）*succedere* では49例中２例、*capitare* では84例中２例、*bastare* では40例中３例与格が出現する。

15）Skytte（1983）では、*ripugnare* の *diInf* 補文との交替が指摘されているが、収集したデータには見られなかった。

16）定形補文の使用率は、*bastare*（17.6%）、*convenire*（2.9%）、*toccare*（0%）、*premere*（6.6%）、*dolere*（9.5%）、*spettare*（13.3%）である。

17）定形補文の使用率は、*importare*（56.3%）、*rincrescere*（20.0%）、*dispiacere*（37.7%）となっている。

18）（29a）には与格の出現率が80% 以上の動詞を列挙している。

19）意味役割としても、この与格部分は <Experiencer> というより <Benefactive>「受益者」または <Location>「場所」のようなものになると考えられる。

20）*accadere* にだけ *φInf* 補文の例が１例見られた。

21）*accadere* は896例のうち補文としての使用は65例（7.3%）、*avvenire* は2063例中15例（0.7%）、*succedere* は886例中54例（6.1%）であった。

22）*capitare* は819例中補文として312例（38.1%）使用されている。

23）*spettare* が非定形補文98例中13例（13.3%）、*toccare* が165例中３例（1.8%）*diInf* 補文として使用されている。

参考文献

Belletti, Adriana and Luigi Rizzi (1988) “Psych-Verbs and θ-Theory,” *Natural Language and Linguistic Theory 6*, 291-352.

Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*, D. Reidel Publishing Company.

Graffi, Giorgio (1994) *Sintassi*, il Mulino.

Maiden, Martin (1995) *A Linguistic History of Italian*, Longman.

Moro, Andrea (1997) *The Raising of Predicates: Predicative Noun Phrases and the Theory of Clause Structure*. Cambridge University Press.

Rizzi, Luigi (1991) “Il sintagma preposizionale,” in Lorenzo Renzi (ed.) *Grande grammatica italiana di consultazione*, *Vol.I: La frase. I sintagmi nominale e preposizionale*, 508-531, Il Mulino.

Serianni, Luca (1989) *Grammatica italiana: Italiano comune e lingua letteraria 2nd ed*. UTET Libreria.

Skytte, Gunver (1983) *La sintassi dell’infinito in italiano moderno Volume I*. Etudes Romanes de le Université de Copenhague.

Skytte, Gunver (1985) “L’alternaza ‘di + infinito/ che +verbo finito’ in italiano, in prospettiva diacronica,” *Società di Linguistica Italiana 23: Linguistica storica e Cambiamento Linguistico*, 245-250.

Skytte, Gunver, Giampaolo Salvi, & M. Rita Manzini (1991) “Frasi subordinate all’infinito,” in Lorenzo Renzi & Giamaolo Salvi (ed.) *Grande grammatica italiana di consultazione Volume II: I sintagmi verbale, aggettivale, avverbiale. La subordinazione*, 483-569, Il Mulino.

Ueno, Takafumi (2014) “The Existential Expression of Engish and Italian: The Derived Sentences from the Small Clause Structure and the Unaccusative Structure,” *NIDABA 43*, 89-98.

上野貴史（2010）「過去分詞の統語機能と派生語」，『イタリア学会誌 第60号』，89–110.

上野貴史（2013）「イタリア語における文法文型と文要素配列：動詞の意味構造と結合価」，『言語文化学会論集 第41号』，75–105.

上野貴史（2014）「小節構造における不定詞補部：再構造化構文における *di*-INF と *φ*-INF」，『言語文化学会論集 第43号』，3–17.

The Syntactic Structure and Distribution of Complement Sentences in Italian Unaccusative Verbs

Takafumi UENO

Some unaccusative verbs in Italian have the complement sentence as an argument which becomes the logical subject of the verb. We can describe the syntactic structure as the complement sentence (CP), which functions as a logical subject of the sentence, and a selective dative (*a* NP), as in (1).

(1) $[_{V}$ V]($[_{PP}$ *a* NP])$[_{CP}$ CP]

There is the finite complement sentence, introduced by the complementiser *che*, and two non-finite complement sentences: zero infinitive (*φInf*) and *di* infinitive (*diInf*).

In this paper, we analyze the distribution of the complement sentences in Italian unaccusative verbs by utilizing the CODIS Corpus; and examine the forms of each verb from the point of view of their syntactic structure. The relation between the syntactic structures of unaccusative verbs and the argument structure can be described as in (2):

(2) a. <(Experiencer), Proposition>

the Small Clause Structure：A② $[_{VP}$ $[_{V'}$ $[_{V}$ **V**]($[_{PP}$ *a* NP])$[_{SC}$ $[_{CP}$ *che*]$[_{AP}$ AP]]]]

A③' $[_{VP}$ $[_{V}$ **V**]$[_{SC}$ $[_{DP}$ DP]$[_{DP}$ *φInf*]]]

A④ $[_{VP}$ $[_{V'}$ $[_{V}$ **V**]($[_{PP}$ *a* NP])$[_{SC}$ $[_{DP}$ *φInf*]$[_{AP}$ AP]]]]

the Unaccusative Structure：A①' $[_{VP}$ $[_{V'}$ $[_{V}$ **V**]($[_{PP}$ *a* NP])$[_{CP}$ *che*]]]

A⑤' $[_{VP}$ $[_{V'}$ $[_{V}$ **V**]$[_{PP}$ *a* NP_i]$[_{CP}$ $[_{C}$ *di*]$[_{TP}$ $[_{PRN}$ PRO_i]$[_{T'}$ $[_{T}$]$[_{VP}$ *Inf*]]]]]]

b. <(Experiencer), Theme>

the Unaccusative Structure：B① $[_{VP}$ $[_{V'}$ $[_{V}$ **V**]($[_{PP}$ *a* NP])$[_{CP}$ *che*]]]

B② $[_{VP}$ $[_{V'}$ $[_{V}$ **V**]($[_{PP}$ *a* NP])$[_{CP}$ *φInf*]]]

B④ $[_{VP}$ $[_{V'}$ $[_{V}$ **V**]$[_{PP}$ *a* NP_i]$[_{CP}$ $[_{C}$ *di*]$[_{TP}$ $[_{PRN}$ PRO_i]$[_{T'}$ $[_{T}$]$[_{VP}$ *Inf*]]]]]]

c. <Benefactive, Theme>

the Small Clause Structure：B③ $[_{VP}$ $[_{V}$ **V**]$[_{SC}$ $[_{DP}$ *φInf*]$[_{PP}$ *a* NP]]]

d. <(Benefactive), Event>

the Small Clause Structure：B⑤ $[_{VP}$ $[_{V'}$ $[_{V}$ **V**]($[_{PP}$ *a* NP])$[_{SC}$ $[_{PRN}$ pro_i]$[_{CP}$ $[_{C}$ *di*]

$[_{TP}$ $[_{PRN}$ PRO_i]$[_{T'}$ $[_{T}$]$[_{VP}$ *Inf*]]]]]]]

Although in modern Italian the finite complement sentence and *φInf* complement sentence that originally existed coexist with the *diInf* complement sentence that developed from the finite complement sentence, the distribution is dependent on the syntactic structure.